

全カリの“たまり場（サロン）”という夢

菅沼 隆

正月明けにこの原稿を書いているので、私の「夢」を書かせていただく。

全カリ総合科目の担当者連絡会後の懇親会に参加すると、実に多彩な専門分野の先生方とお話をするができる。自分の専門と異なる分野のお話を聞くと、知の世界の無限の多様性と広がりを楽しさを感じ、普段使っていない脳細胞が活性化し、心地よい。異なる専門分野との知的交流が新しい研究のきっかけを作ってくれることもある。

全カリ主題別B（旧総合B）は、複数の教員で一つの授業を運営し、特定のテーマについて多面的に考察する授業である。何度も授業を担当されるリピーターの先生もおられる。そのような先生は主題別Bの楽しさをよくご存知なのだろうと思われる。その楽しさの一因として、異なる分野の先生と共同で授業を作ることが挙げられるだろう。

だが、主題別Bに関わった経験のない教員はその楽しさを知らない。このため何らかのきっかけがないと「主題別Bを担当しよう」という気持ちは起こらないだろう。私の場合は、親しい同僚から“無理矢理”頼まれて主題別Bで数回担当の授業を引き受けたことがきっかけであった。授業に参加して他の先生の講義を聴くと大変楽しく、欠席することが勿体なく感じた。結局、すべての回の授業を聴講した。主題別Bが教員である私の視野を広げてくれたことを大いに実感した。

これまでのところ主題別Bの授業担当者は、コーディネーターである専任教員の個人的ネットワークや学部・研究所・部局のネットワークを基盤に誘われることが多い。だが、全カリ総合の更なる活性化を展望する場合、より自由な“知の交流”を図り、それをベースとしたユニークな授業の創造が求められてもよい。そのためには異なった専門分野の教員が日常のかつ偶然に交流できる場が必要である。

担当者連絡会後の懇親会の楽しさの理由は、それがあ種種の「知的なサロン」になっているからである。コーヒーやお酒を飲みながら、気軽に自分の問題関心を話し、また他の方の問題関心を聞く知的な空間であった。ヨーロッパの知識人・貴族が集って新たな知を創造したサロンはそのようなものだったのではないと思われる。

懇親会は年二回限りで継続性がない。継続的な空間＝「全カリ教員のたまり場」を作ることはできないだろうか？日中はコーヒー・紅茶と軽食、夕方以降はお酒も飲めるような場である。そこで会話を楽しみ、新しい友人を作る。友人が作ればそれだけで“たまり場”は成功である。その中から一つでも新しいグループ研究や主題別Bの企画が誕生すれば大成功といえる。“たまり場”の運営は全カリ運営センターとリサーチ・イニシアティブ・センターがタイアップすることが望ましい。「知の十字路」全カリは新たな空間を獲得することになる。

すがぬま たかし

（本学経済学部教授／全学共通カリキュラム運営センター副部長）